可児市埋文調査報告　５５

国史跡美濃金山城跡発掘調査概報

Ⅱ

２０１９

可児市教育委員会

滋賀県立大学

可児市埋文調査報告　５５

国史跡美濃金山城跡発掘調査概報

Ⅱ

２０１９

可児市教育委員会

滋賀県立大学

例　　言

1．本書は可児市教育委員会、滋賀県立大学が平成30年度に実施した可児市兼山字古城山に所在する国史跡　美濃金山城跡の発掘調査報告書である。

2．調査期間及び調査担当は下記のとおりである。
第七次調査　平成30年8月9日～9月28日　中井均（滋賀県立大学人間文化学部）
長江真和・村上慶介（可児市教育委員会）

3．調査参加者は下記のとおりである。
植田紘正、齊藤秀香、井内南奈香、岩崎心人、遠藤あゆむ、佐藤佑樹、柴田慎平、高瀬裕太、野崎成二、三木将弘、鈴木陸、三瓶裕輔、伊東涼太、片岡啓、松原草太、石野稜真、一井健之介、小林風雅、杉山友太、西川萌絵、野々口蒼太、吉田靖吾（以上滋賀県立大学学生）

4．本書は分担して執筆し、執筆者名は文末に記した。遺物写真撮影は齊藤が行い、編集は長江、中井、村上、植田、松原が行った。

5．遺物の図面及び写真は、口縁部や底部など土器の特徴がわかるものを選別して掲載し、小破片は掲載していない。

6．現地調査の過程で下記の方々に多大なるご指導とご協力を賜った。
小野友記子、加藤理文、河本愛輝、島田章広、杉山佳奈、田ノ下雄二、萩原さちこ
松井一明、溝口彰啓、美濃金山城おまもりたい、森久子、吉田実華（五十音順・敬称略）

7．本書に掲載した出土遺物、図面、写真は、すべて可児市教育委員会で保管している。

本文目次

例　言

第１章　地理的・歴史的環境 …… 1

第２章　調査にいたる経緯と経過 …… 2

第３章　調査成果
　第１節　Ⅰ区 …… 4
　第２節　Ⅲ区 …… 8
　第３節　Ⅳ区 ……12

第４章　まとめ
　第１節　遺物と遺構について ……14
　第２節　まとめ ……15

写真図版……17

図版目次

図１　主郭平面図……3
図２　Ⅰ区平面図……5
図３　a-a’ 土層図……6
図４　b-b’ 土層図……6
図５　c-c’ 土層図……6
図６　d-d’ 土層図……6
図７　Ⅰ区出土遺物……7
図８　Ⅲ区平面図……9
図９　e-e’ 土層図…… 10
図 10　f-f’ 土層図…… 10
図 11　g-g’ 土層図 …… 10
図 12　h-h’ 土層図 …… 10
図 13　i-i’ 土層図…… 10
図 14　j-j’ 土層図…… 10
図 15　k-k’ 土層図 …… 10
図 16　l-l’ 土層図…… 10
図 17　Ⅲ区出土遺物 …… 11
図 18　Ⅳ区平面図 …… 12
図 19　m-m’ 土層図 …… 13
図 20　n-n’ 土層図 …… 13
図 21　o-o’ 土層図 …… 13
図 22　Ⅳ区出土遺物 …… 13

第１章　地理的・歴史的環境

地理的環境

可児市兼山は、岐阜県中南部を流れる木曽川中流左岸に位置し、太田盆地の一部を形成する掌状地である。東は加茂郡八百津町伊岐津志、西側および南側を可児郡御嵩町伏見と接しており、木曽川を隔てた北側は加茂郡八百津町和知と境をなしている。木曽川は兼山中心部より５㎞程度西へ下った可児市川合で飛騨川と合流する。

町場は木曽川の流路に沿うかたちで帯状に形成されており、町場のすぐ南側には、東から坊主山、古城山、高根山など町場との比高差約170m 級の険しい山々が連なっている。美濃金山城跡は標高276m の古城山上に位置し、兼山の町だけでなく、太田盆地を一望できる位置に所在する。

歴史的環境

(美濃金山城について)

美濃金山城の歴史は、天文６年（1537年）に斎藤大納言が「烏峰城」とし、入城したことからはじまる。その際に、村の名前が中井戸村から金山村と改められた。なお、現在の名称は明暦２年（1656年）に尾張藩による支配のもと、藩領内の加茂郡金山との混同を避けるため、兼山と改められている（矢崎 1937)。

天文17年（1548年）に斎藤大納言は、敵対関係にあった土岐久々利氏の居城である久々利城にて謀殺された。その後久々利氏は、烏峰城に一族の土岐十郎左衛門を留守代として置いた。

永禄８年（1565年)、織田信長は美濃侵攻を進める中、家臣である森可成に烏峰城を与えた。城主となった可成は烏峰城を金山城と名を改めた。その後可成が元亀元年（1570年）に､浅井･朝倉連合軍との間で勃発した宇佐山城の戦いにて戦死したことにより、長子である長可が跡を継ぎ、金山城主となった。

天正10年（1582年)、長可は信州川中島に転封となり、海津城へ入城した。それに伴い、弟の乱丸が金山城主となった。同年６月２日に本能寺の変が起こり、乱丸とともに、兄弟である坊丸、力丸も命を落とした。それにより、長可が再び金山城主となったが、天正12年（1584年）に小牧・長久手の戦いに豊臣方として出陣し、命を落とした。長可亡き後、森家当主として金山城主を継いだのは、可成の末男であり、長可の弟にあたる忠政であった。忠政は慶長５年（1600年）に信州川中島に転封となった。金山城は、犬山城主石川貞清が支配を兼帯、その後、松平忠頼、小笠原吉次が城主となり、慶長６年（1601年）に破却されたと考えられている。

(破却後の古城山と指定について)

元和元年（1615年）に金山村が尾張藩領となったことに伴い、金山城のある古城山は藩の留山となり村人の入山は禁止された。明治以降は官林となり、大正11年に兼山町会が古城山の払い下げを願い出たが､旧皇室典範上の皇室世襲財産である世伝林ということで､かなわなかった。

昭和20年以降には、古城山は国有林となった。それに伴い昭和26年に国有林野払下特別処置法が制定されたことにより、兼山町は昭和28年に古城山の払い下げを受けた。昭和38年に金山城跡は町史跡となり、昭和42年に県史跡に指定された。平成25年に金山城は、これまでの発掘調査成果をもとに、「美濃金山城跡」として国史跡に指定された。指定名称は、先に指定を受けた群馬県太田市に所在する金山城との混同を避けるため、美濃金山城としている。

（村上）

第２章　調査にいたる経緯と経過

美濃金山城跡は、国史跡指定を目指すため、平成18～22年度までの５次にわたる調査の中で遺跡の内容及び範囲確認を行い、平成25年度に国史跡となった。その後の整備の指針となる整備基本計画を策定していくにあたり、各曲輪の構成要素が不明な部分について調査をしていくこととし、平成30年度は主郭の２年目の調査にあたる。

調査は、埋め戻しを含め平成30年８月９日～９月28日に行い、Ⅰ区の追加調査と新たに虎口部分に「Ⅲ区」、主郭の西側の凹み部分に「Ⅳ区」を設定して行った。

Ⅰ区では昨年度の調査において検出された半地下構造建物の北側の範囲を調べるために6-1トレンチを設定した。調査では東側の石垣列の続きが２石検出された。石垣は整地面に造られ、２段積まれている。北側の石垣列の有無を確かめるために２本のサブトレンチ（6-2、6-3）を設定した。整地面に根固めの石と思われる石が検出されたり、トレンチ内に大型の石材が見られたりすることから、北側に石垣があったことが想定されたが、調査では石垣列は検出されなかった。そのため、北側の石垣列は破城の際に落とされたと想定される。また、石垣の根元に断ち割り調査を行った結果、整地面の下には礫が充填されている層は見られたが、昨年度検出されたⅠ期の面は検出されなかった。

Ⅲ区は主郭へとあがる虎口部分であり、全体部分を1トレンチとして掘り下げを行うと岩盤部分と整地層、礎石（礎石５）が検出された。北、東、南とサブトレンチを設定し、整地層等の確認を行った。1-1トレンチでは、北側石垣の直下にある礎石が整地面に据えられていることが確認された。1-2トレンチは、整地層の下から新たに礎石６が検出され、この礎石の上に整地を行い、石垣を築いていることが確認された。1-3トレンチは、南側の石段が城跡当時のものではなく、後世のものであることが再確認された。2トレンチは、虎口の北側にある石垣と東側にある石垣の前後関係を確認するために設定し、北側の石垣が東方向に続いておらず裏込めと思われる礫層が検出された。これにより北側と東側の石垣は同時期に造られていることが分かった。

Ⅳ区は、現地形で凹みがある場所であり、石組が見られる部分である。また、平成29年度で検出された半地下構造建物と主郭の反対に位置し、虎口があるのではないかと想定されたためトレンチを設定した。この場所は部分的に後世の撹乱が入っており、近現代の遺物が出土した。また、石組も後世に造られたものであることも分かり、造成も弱いことから虎口ではないことが明らかとなった。

（長江）

図１　主郭平面図

第３章　調査成果

第１節　Ⅰ区

昨年度調査では内向き石垣 SV1・SV2 を検出しているが、今年度は SV1 の北端を確認するため、東西に 6-1 トレンチを設定している。その後、北側に 6-2、6-3 トレンチを設定した。

調査の結果、6-1 トレンチ及び 6-2 トレンチ内において、昨年度調査で検出された石垣 SV1 の延長部である曲輪の内側に面を持った石垣が確認されている。礫層である７層は瓦を伴う層であり、昨年度調査同様、内向き石垣の埋土の可能性が想定できる。７の礫層下は、しまりがかなり強い８層であるが、6-1 トレンチより約 20cm 北まで続いており、石垣造成土もしくは破城時に伴う流土と推定される 10 層及び 11 層へとつながる。

6-2 トレンチでは内向きに面をもった北側の石垣は確認されなかったが、整地土に根固めの石と思われる石が２石確認されるとともに、根固めの石の抜き取り痕のような跡も確認されている。また、トレンチ内では、地表面に出ている状態で、幅 95cm、高さ 65cm、控え 24cm 程度の石材がみられ、当時は内側に面を持った石垣としてコーナー部を形成していた北側の石垣石材の可能性が想定される。

6-3 トレンチは、北側に撹乱があり、礫層の範囲は確認できなかったが、北側に石垣列が残っていないことが判明している。トレンチ内の礫層中においてやや小ぶりな石材が確認された。この石材の下部、原位置については不明であるが、７の礫層下に見られる、11 の石垣造成土ないし破城時に伴う流土が、石の下に流れ込んでいる可能性がある。6-2 及び 6-3 トレンチ内の礫層についても、現段階では内向き石垣の埋土の可能性が想定される。

今回の調査により、昨年度調査区の１トレンチ及び２トレンチで認められる、地山面、石垣構築時の整地面、石垣埋土の礫層面という堆積状況は 6-1 トレンチも大方共通していることが判明した。

SV1（図４）

昨年度調査で検出された石垣 SV1 の延長部と思われる、曲輪の内側に面を持った石垣を確認した。6-1 トレンチ内では北側が１段、南側では２段残存しており、残存高は約 80 ～ 90cm であり、石材はチャートが用いられている。石材は自然石ないし粗割石で、北側が幅 90cm、高さ 40cm 程度、南側の１段目が幅 80cm、高さ 70cm 程度とやや大ぶりな石材を用いている。検出された石垣前面を断ち割ったところ、内向きの石垣構築に関しては、昨年度調査の結果同様、地山の上に盛土をし（礫混じりの９層にあたる）、その上に整地して石垣を築いていることが明らかとなった。

遺物（図７）

Ⅰ区では、41 点の遺物が出土した。出土遺物のほとんどは瓦の破片であり、30 点出土している。そのうち７～９は、礫層中から出土した丸瓦の破片であり、コビキＢ手法である。

１は、6-3 トレンチの礫層中から出土したロクロ調整のかわらけの破片で、厚手のものである。５層から出土した３は、口縁部のみが残存している灰釉端反皿である。

（齋藤）

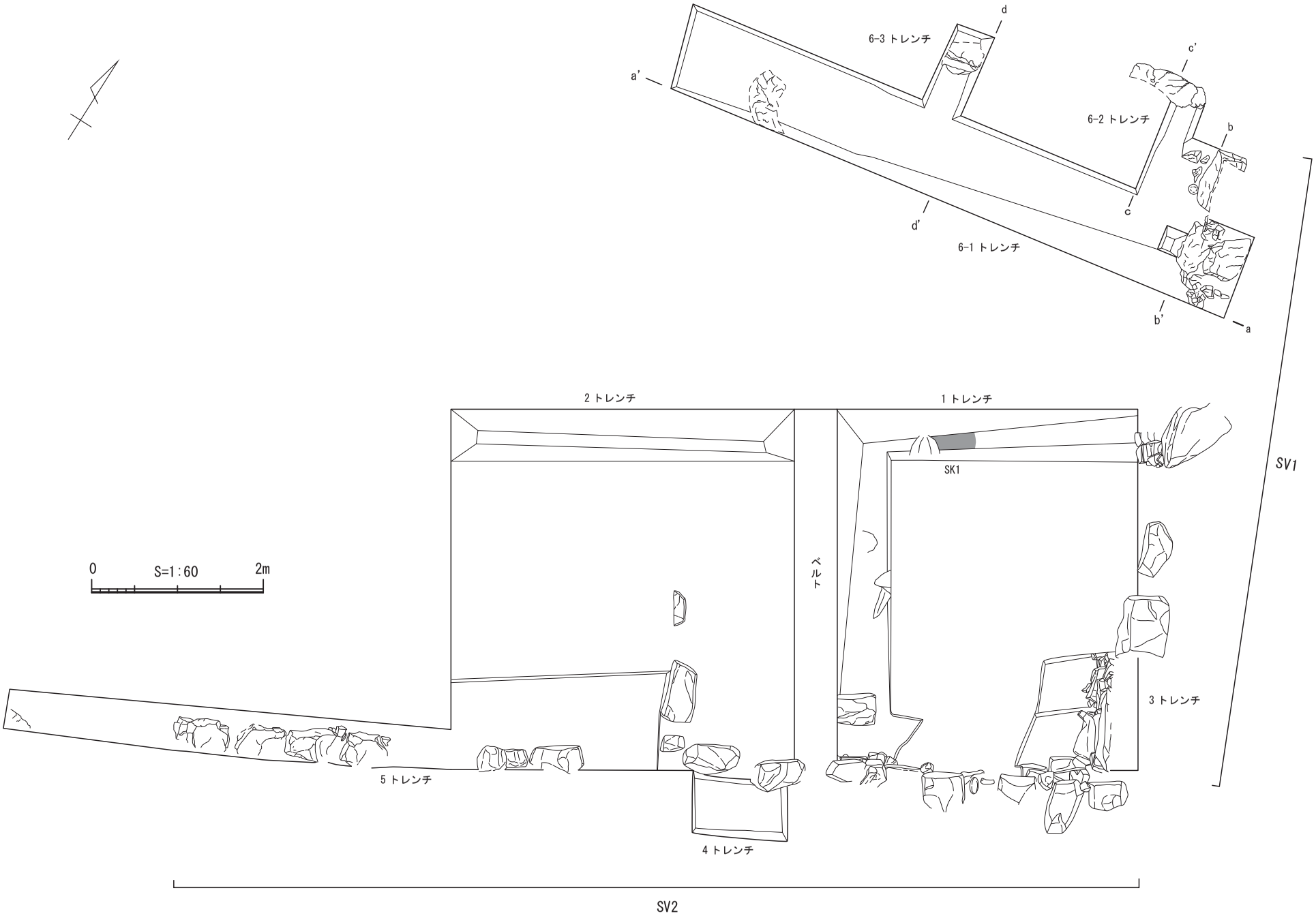

6-3 トレンチ
6-2 トレンチ
6-1 トレンチ
a'
a
b
b'
c
c'
d
d'
2 トレンチ
1 トレンチ
SK1
ベルト
3 トレンチ
4 トレンチ
5 トレンチ
SV1
SV2
0
S=1:60
2m

図２ Ｉ区平面図

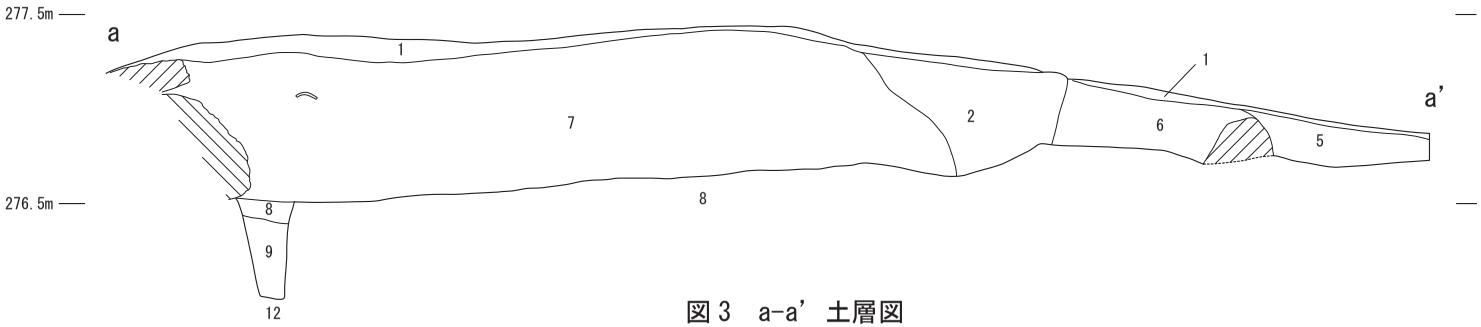


図3　a-a' 土層図

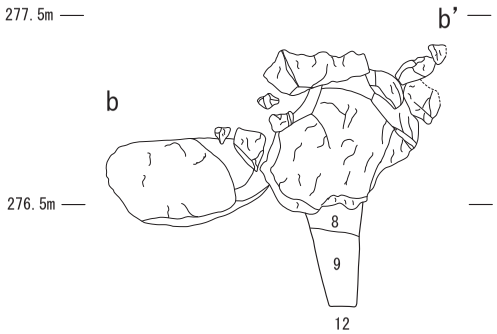


図4　b-b' 土層図

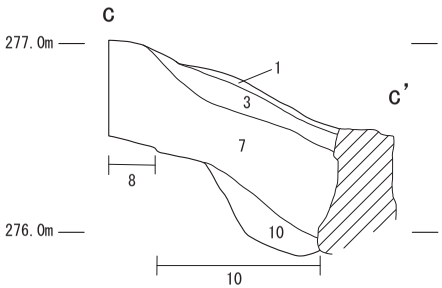


図5　c-c' 土層図

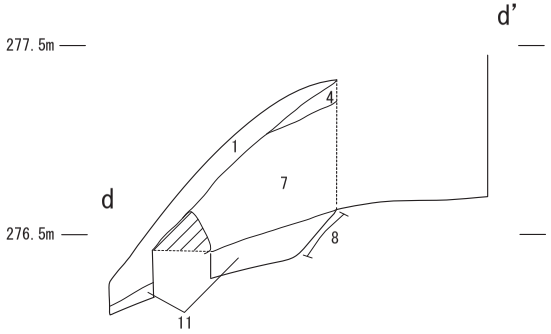
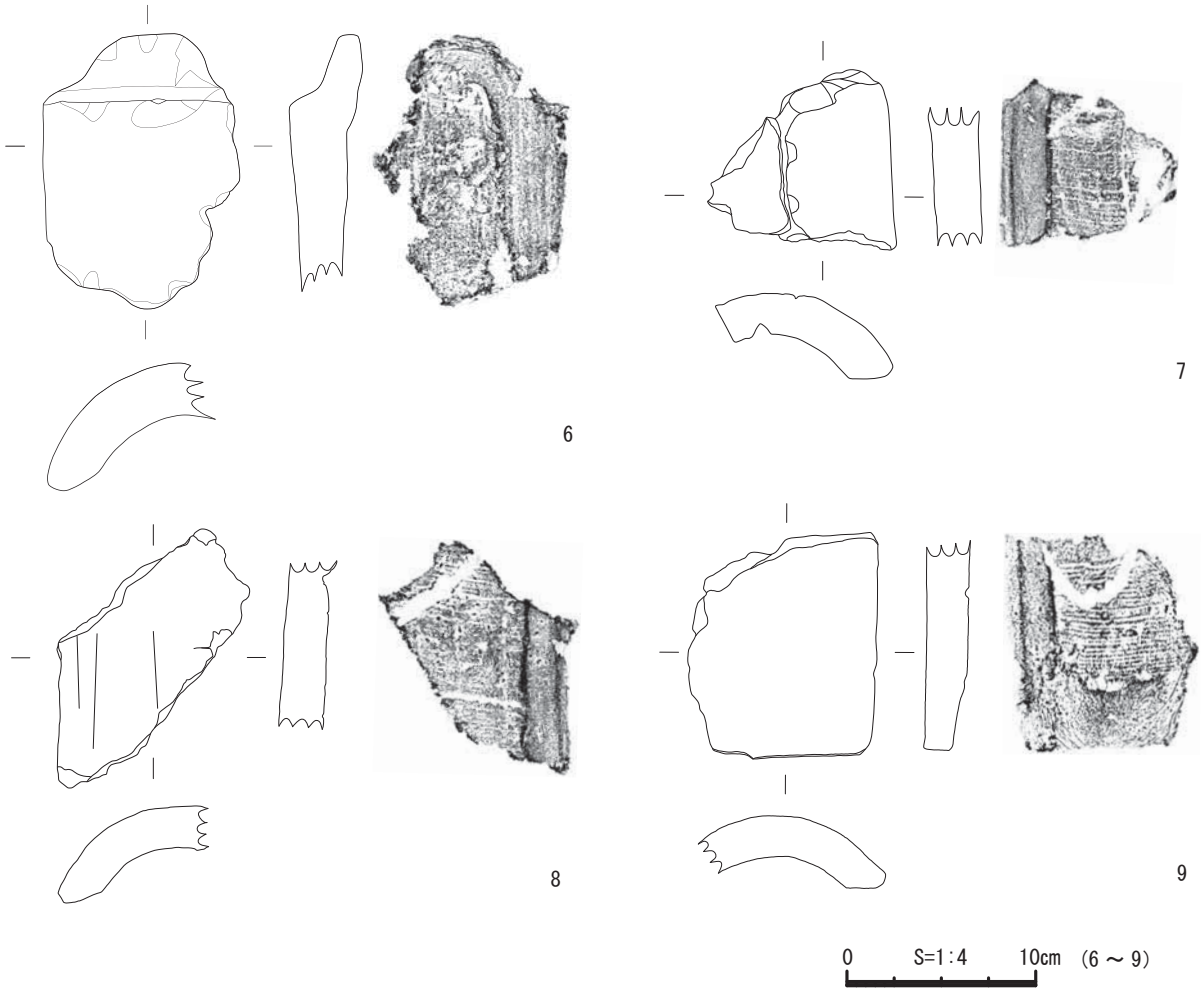


図6　d-d' 土層図

0　S=1:40　1m

1　腐葉土　〔表土〕
2　根撹乱　〔撹乱層〕
3　明黄褐色土　しまりやや強い　粘性やや強い　（Φ2～10cmの礫含む）　〔流土〕
4　灰白色土　しまりやや弱い　粘性弱い　（Φ3～5cmの礫含む）　〔堆積土〕
5　明黄褐色土　しまり弱い　粘性弱い　（Φ2～7cmの礫をわずかに含む）〔堆積土〕
6　明赤褐色土　しまりやや弱い　粘性やや弱い　（Φ2～12cmの礫含む）　〔石垣埋土か破城の際に形成された層〕
7　礫層　しまり弱い　粘性弱い　（Φ2～15cmの礫を多く含む）〔石垣埋土〕
8　明黄褐色土　しまりかなり強い　粘性やや弱い　（炭化物少量含む）　〔整地層〕
9　褐色土　しまりやや弱い　粘性やや弱い　（Φ2～8cmの礫含む）　〔石垣造成土〕
10　橙色土　しまりやや弱い　粘性やや強い　（Φ2～10cmの礫含む）　〔石垣造成土か破城に伴う流土〕
11　にぶい褐色土　しまりやや弱い　粘性やや強い　（Φ1～2cmの礫を少量含む）〔石垣造成土か破城に伴う流土〕
12　地山

図版	種別	器種	出土位置	時期・分類	法量 ()は現存、〔〕は復元				釉薬	備考
					口径	器高	底・台径	その他		
1	土師器	かわらけ	石垣埋土	—	—	(1.9)	—			ロクロ調整
2	瀬戸美濃	端反皿	表土	—	—	(1.8)	—		灰釉	
3	瀬戸美濃	端反皿	Ⅰ区堆積土	—	—	(1.3)	—		灰釉	
4	瀬戸美濃	丸碗	Ⅰ区堆積土	—	—	(1.9)	—		鉄釉	
5	瀬戸美濃	匣鉢	撹乱層	—	—	(3.9)	—		鉄釉	



図版	種別	器種	出土位置	コビキ	筒部長	玉縁長	筒部幅	高さ	備考
6	瓦	丸瓦	石垣埋土		(11.0)	(2.7)	(10.1)	—	
7	瓦	丸瓦	石垣埋土	B	(9.0)	—	(9.1)	—	布目痕・吊り縄痕・釘孔有り
8	瓦	丸瓦	石垣埋土	B	(9.0)	—	(9.2)	—	布目痕・吊り縄痕あり
9	瓦	丸瓦	石垣埋土	B	(11.6)	—	(10)	—	吊り縄痕あり

図７ Ⅰ区出土遺物

第２節　Ⅲ区

主郭の虎口は第１次調査で北、東、西の三方向の石垣（順に SV4、SV3、SV5）と SV4 下の川原石を使用した礎石列（SB1、それぞれ東より順に礎石１～４とする）が確認されている。そこで１トレンチは虎口内部の未調査部分の調査を行った。また、既に確認されている石垣と礎石列、虎口内部に構築されている石段の性格を確認するため、1-1 から 1-3 トレンチを設置した。また、２トレンチは SV3 と SV4 の前後関係の確認のため、設定した。

１トレンチでは虎口空間の表土を除去した段階で、虎口中央部より岩盤を検出し、東側部からは上部に平坦面を持つ石（礎石５）を検出した。岩盤以北は地山を整地した面が見られ、岩盤以南は一部撹乱されていたものの、かなりしまりの強い面があり、北側と同時期の整地面とみられる。礎石５の周囲には礫が充填され、掘り込んだのち礎石５を据えている。礎石５と岩盤の上面はおおむね同一の高さであるが、虎口内は全体的に東へやや傾斜している。

また、１トレンチ西側の主郭へ上がる石段は、石下より腐葉土を検出したことから、近年の整備により設置されたものである。

1-1 トレンチは SB1 のうち礎石１と礎石２の間を調査し、SV4 及び SB1 の据え付け面を確認した。SV4 は８層及び地山に据えられており、SB1 は地山面及び５層の上に据えられている。SB1 は同じ構築物に使用された礎石と推測されるが、構築物の様子は不明である。

1-2 トレンチからは上面が平坦な石（礎石６）を検出した。礎石６は虎口内北東部から検出した。礎石６は地山面に据えられており、周囲にはわずかに礫を含む７層が充填されている。SV3 は５、６、８、９層に据えられている。５層は礎石６を埋めて SV3 の整地に伴う層であり、６層は礎石６に伴う整地土である。整地土層は一部撹乱を受けている（１・３・４層)。８層は城機能時の層ではあるが、どの時期に形成されたかは不明である。９層はしまりのある土で整地層とみられるが、掘り込みの埋土の可能性もある。礎石５と礎石６はともに川原石を用いておらず、同じ地山を整地してある面に据えられているため同時期のものと推測される。しかし、同じ構築物に使用されたかは定かではない。６層は１トレンチで検出した地山を整地した面とおおよそ同一レベルであり、同時期と推測できる。

1-3 トレンチは虎口南側石段の性格確認のため、石段に沿って掘り下げた。石段の下から石を安定させるための土嚢が見つかり、後世に積まれていることが分かった。２層は石段の整地土として機能している。

２トレンチは SV3 の裏込めである 13 層を検出した。13 層からは宝篋印塔の破片が出土した。12 層はしまりが弱く、主郭方向からの流土とみられる。また、SV3 と SV4 の接続部の確認を行ったが、SV4 の延長とみられる石材は確認できなかった。SV3 と SV4 は同層に据えられ、SV4 の北東方向への延長部が確認されなかったことから、同時期に築かれたものとされる。

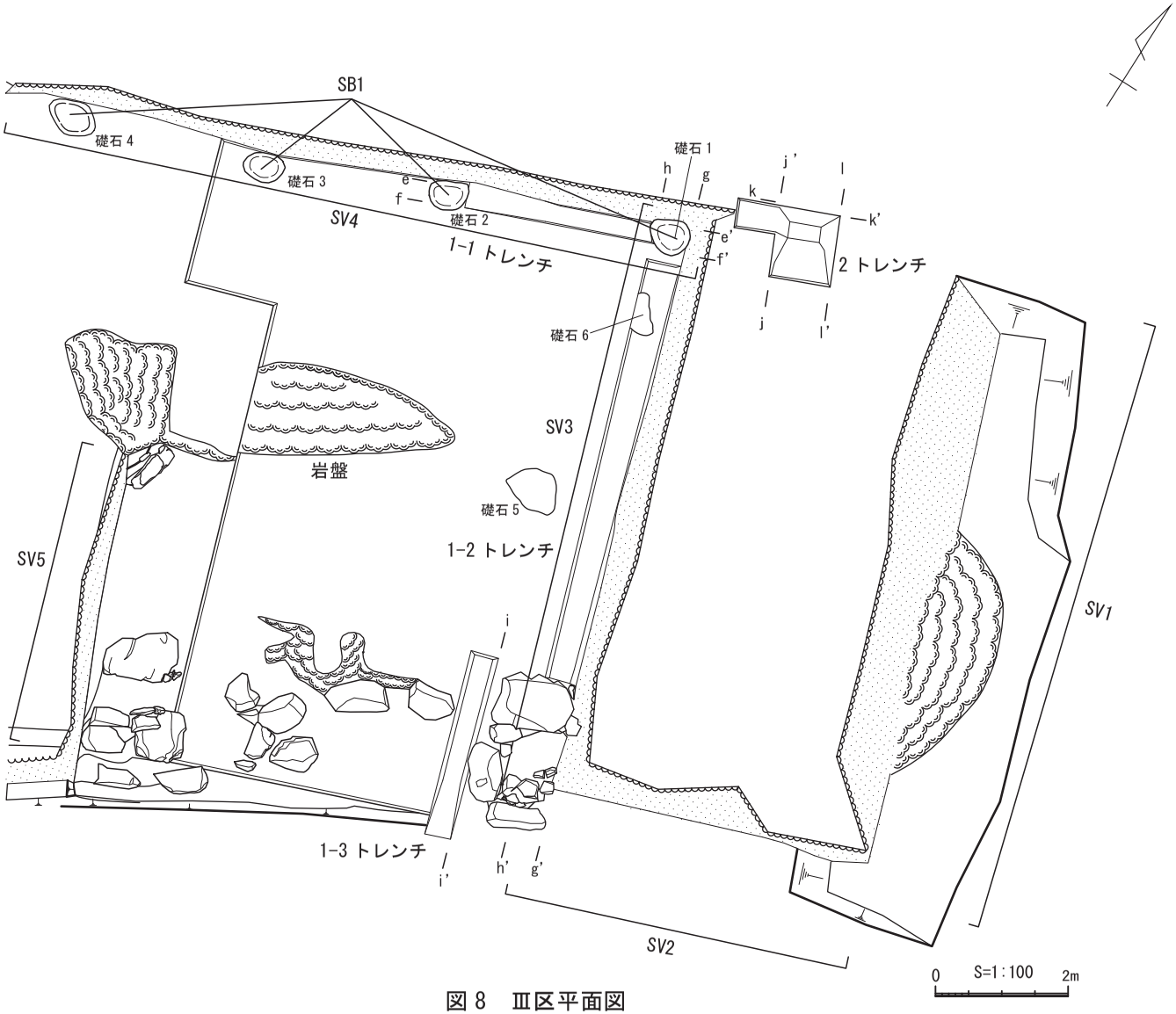

SB1
礎石 4
礎石 3
礎石 2
礎石 1
礎石 6
礎石 5
SV4
SV3
SV5
SV1
SV2
1-1 トレンチ
2 トレンチ
1-2 トレンチ
1-3 トレンチ
岩盤
e
f
e'
f'
g
h
h'
g'
i
i'
j
j'
k
k'
l
l'
0
S=1:100
2m

図 8　Ⅲ区平面図

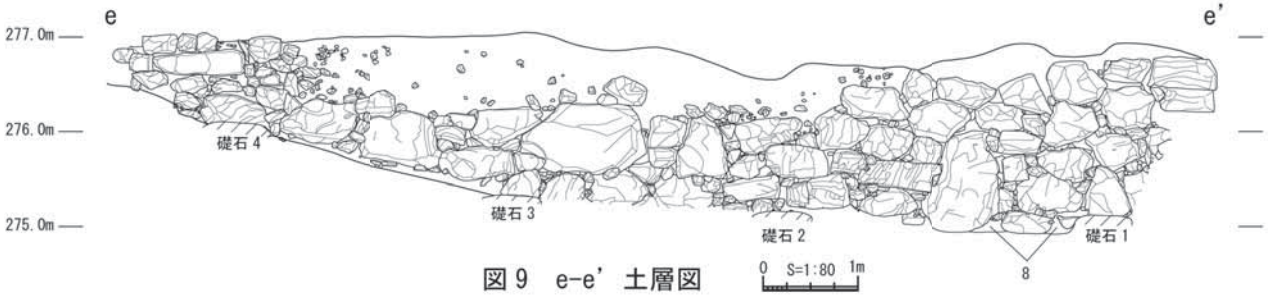


図9　e-e' 土層図

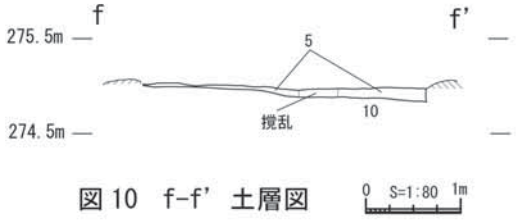


図10　f-f' 土層図

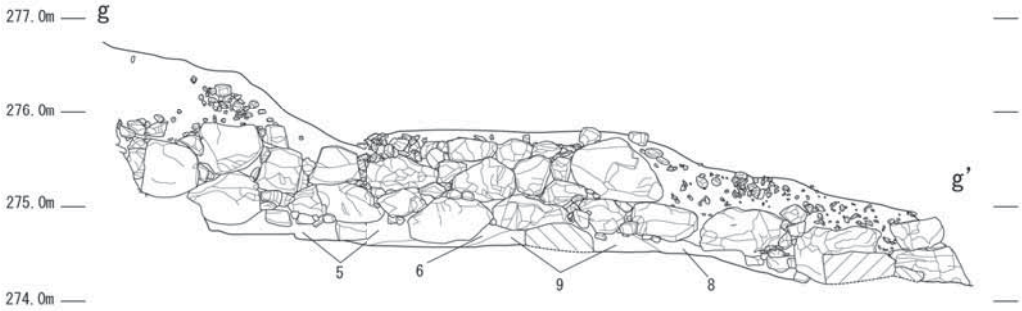


図11　g-g' 土層図

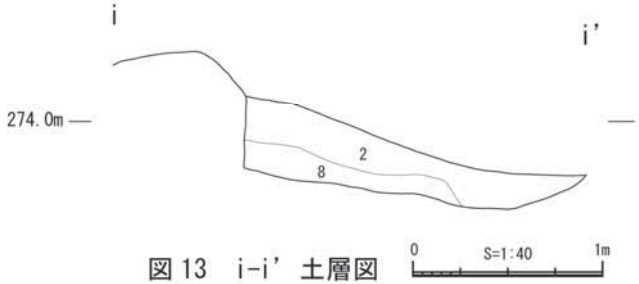


図13　i-i' 土層図

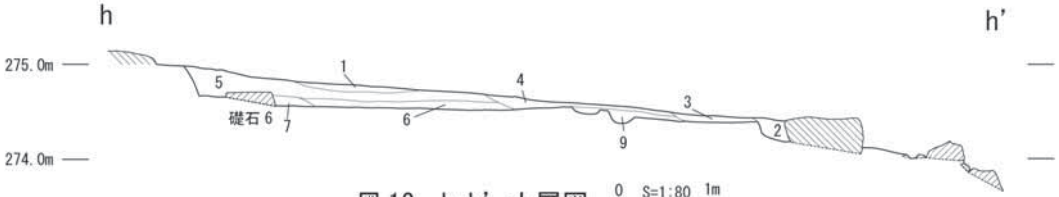


図12　h-h' 土層図

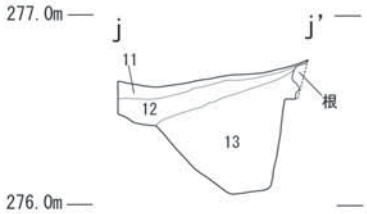


図14　j-j' 土層図

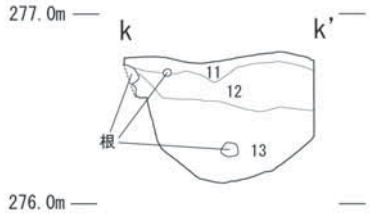


図15　k-k' 土層図

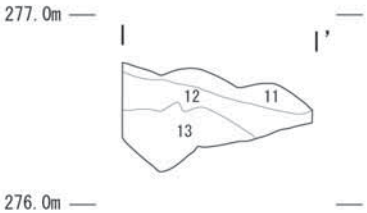


図16　l-l' 土層図

0 S=1:40 1m

1	褐色土	しまり弱い	粘性弱い	(Φ0.5～2cmの礫を少量含む)	〔後世の堆積土〕
2	褐色土	しまりかなり強い	粘性あり	(Φ1～2cmの礫含む)	〔後世の石段裏込め〕
3	黄褐色土	しまり弱い	粘性あり	(Φ0.5～2cmの礫をわずかに含む)	〔後世の堆積土〕
4	黄橙色土	しまり弱い	粘性弱い	(Φ0.5～2cmの礫含む)	〔後世の堆積土〕
5	橙色土	しまりあり	粘性弱い	(Φ5cm程度の礫を多く含む)	〔礎石6埋土、SB1・SV3・SV4据え付け面〕
6	明赤褐色土	しまり強い	粘性あり	(Φ0.5～1.5cmの礫含む)	〔整地土層〕
7	橙色土	しまりあり	粘性弱い	(Φ0.5～1cmの礫をわずかに含む)	〔礎石6の充填土〕
8	明褐色土	しまりあり	粘性あり	(Φ0.5～4cmの礫を少量含む)	〔城機能時の層、時期不明〕
9	明褐色土	しまりあり	粘性あり	(Φ0.5～2cmの礫をわずかに含む)	〔整地土〕
10	地山				
11	腐葉土	〔表土〕			
12	黄褐色土	しまり弱い	粘性やや弱い	(Φ2～10cmの礫含む)	〔流土〕
13	礫層	しまり弱い	粘性やや弱い	(Φ6～20cmの礫を多く含む)	〔裏込め〕

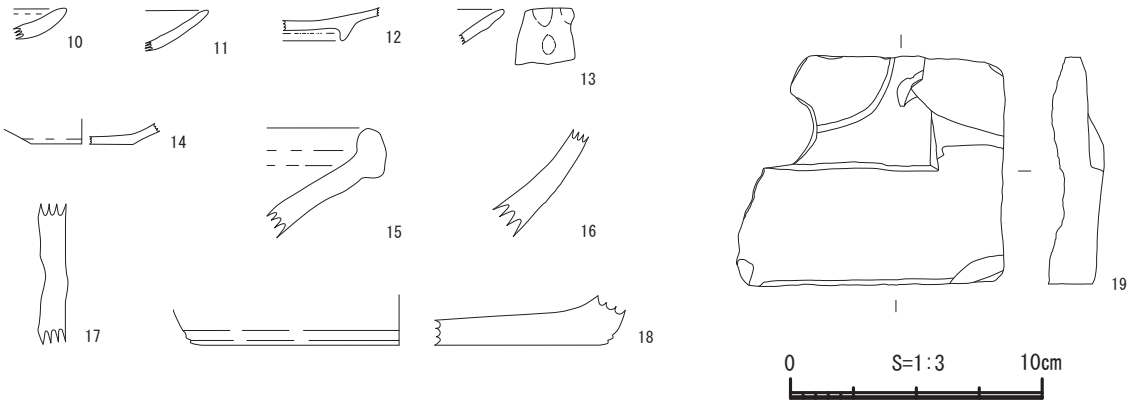
遺物（図 17）

Ⅲ区では計 30 点の遺物が出土し、うち 10 点を実測した。遺物のうち瓦は 13 点出土したが瓦当が残るものは無く、５層以下の層からは出土しなかった。陶器類は瀬戸美濃産がほとんどである。出土した土器・陶磁器類は残存部が少なく、時期が推定できるものは３点であった。12 は白磁の皿である。高台は畳付付近のみ露胎でやや内傾ぎみであり、16 世紀頃のものとみられる。14 は山茶碗の碗である。器壁が薄く腰部が直線的で、東濃型で第 11 型式とみられ、15 世紀頃のものと推定できる。15 は瀬戸美濃産の擂鉢である。口縁部が丸みを帯び、下方に垂れることから大窯第２～３段階のものと考えられる。19 は砂岩製の宝篋印塔の破片であり、裏込め用の石材として使用されたとみられる。

（松原）

註

美濃地方の産出と推定される砂岩を用いた宝篋印塔が、東海各地に分布している可能性が指摘されている（遠江石塔研究会編 2009）。また、美濃地方の砂岩製宝篋印塔の分布と編年の検討がされている（小野木 2012）。



図版	種別	器種	出土位置	時期・分類	法量　()は現存、〔〕は復元				釉薬	備考
					口径	器高	底・台径	その他		
10	土師器	かわらけ	Ⅲ区堆積土	—	—	(1.2)	—			
11	土師器	かわらけ	Ⅲ区堆積土	—	—	(1.6)	—			非ロクロ調整　スス付着
12	白磁	皿	Ⅲ区堆積土	16C	—	(1.3)	—		透明釉	
13	瀬戸美濃	鬚皿	Ⅲ区堆積土	—	〔9.6〕	(1.8)	—		灰釉	
14	山茶碗	碗	礎石6埋土	15C・東濃型第11型式	—	(0.8)	〔4.0〕			底部外面糸キリ
15	瀬戸美濃	擂鉢	腐葉土	15C・大窯第２～３	—	(5.0)	—		錆釉	擂り目3本残存
16	瀬戸美濃	鉢類	Ⅲ区堆積土	—	—	(4.3)	—		錆釉	
17	瀬戸美濃	桶	Ⅲ区堆積土	—	—	(5.6)	—		錆釉	
18	瀬戸美濃	匣鉢	表採	—	—	(2.0)	〔16.0〕			底部外面糸キリ
19	石造物	宝篋印塔	2T裏込め	—	(10.7) × (9.1)					

図 17 Ⅲ区出土遺物

第３節　Ⅳ区

Ⅳ区は主郭の南東部の窪んだ地形にあり、斜面下からのアプローチが考えられたため、虎口を想定した。地山面からの堆積土の厚さは西側で 0.3m 程度、東側で 0.1m 程度であった。露頭していた石列は撹乱層の上に位置していたため、城が機能した時期の遺構ではない。

２層の撹乱層（深さ 0.1m　幅 2.1m）からは、近代の廃棄物が出土したため、後世の廃棄土坑である。また、４層からはかわらけと瀬戸美濃産陶器が出土した。

調査の結果からⅣ区では城が機能した時期の遺構は確認できなかった。

（伊東）

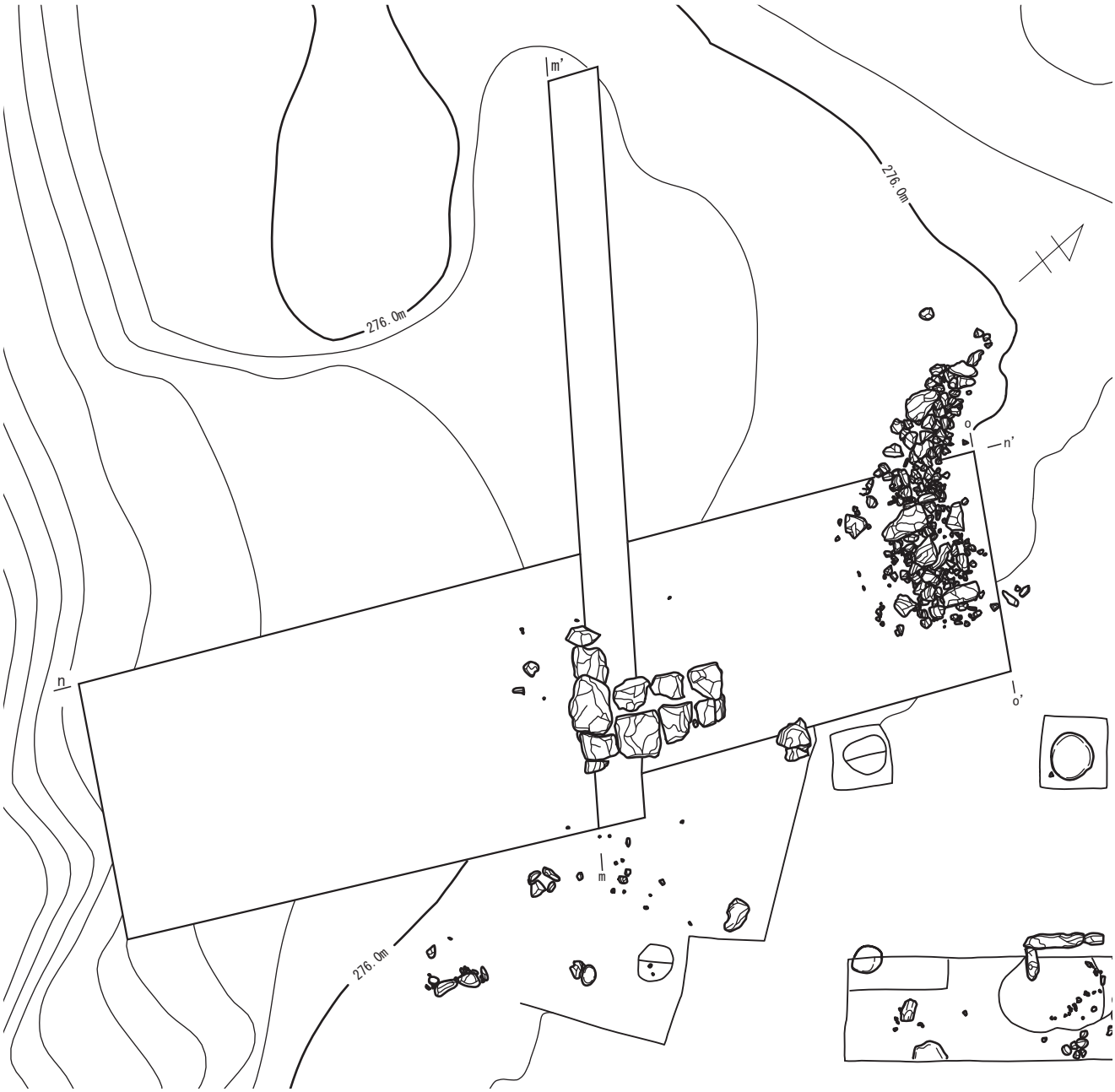


図 18　Ⅳ区平面図

0　S=1:60　1m

図 19　m-m' 土層図

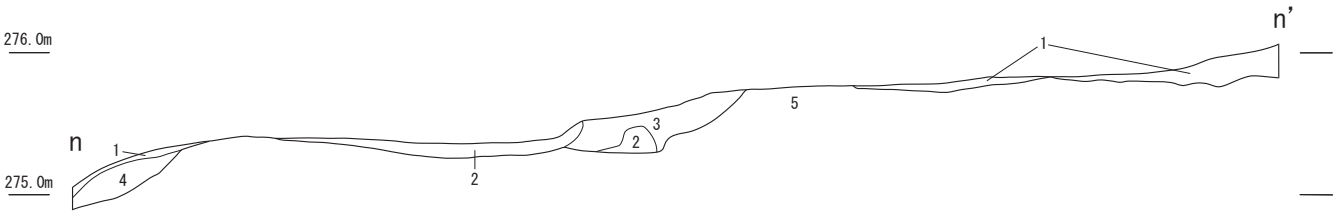


図 20　n-n' 土層図

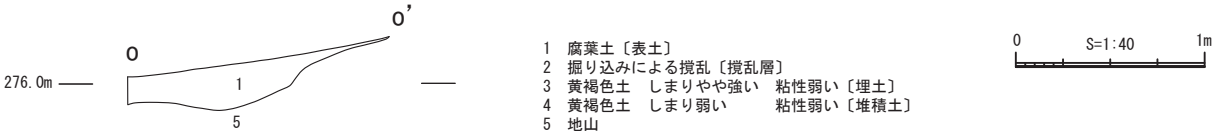
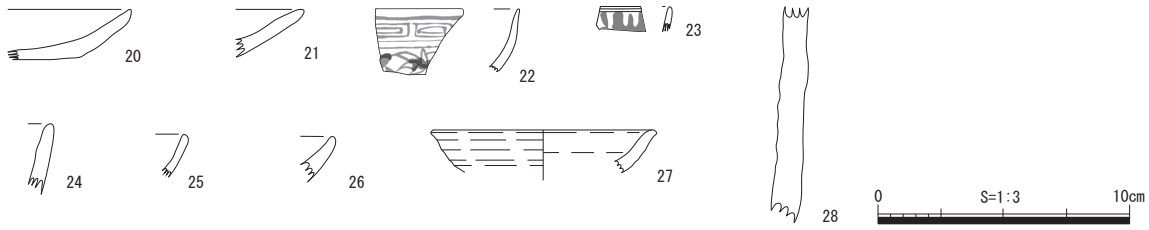


図 21　o-o' 土層図

遺物（図 22）

Ⅳ区では 23 点の遺物が出土したが、ほぼ破片のため、9 点図化した。20、21 は非ロクロ調整のかわらけである。22 は 16 世紀後半の青花碗で外面口縁部に雷門帯、胴部に鳳凰唐草文が施されている。23 も青花碗だが、口縁部の一部しか残らないため、詳細は不明である。24 ～ 28 は瀬戸美濃産陶器であり、24 は瀬戸黒茶碗、25 は鉄釉の縁釉小皿の口縁部片である。26 は灰釉丸皿で 27 は口縁部がやや反り返る大窯第 1 段階後半の端反皿である。28 は錆釉壺類の胴部で、内外ともにロクロ目が強く残る。

（植田）



図版	種別	器種	出土位置	時期・分類	法量()は現存、〔〕は復元				釉薬	備考
					口径	器高	底・台径	その他		
20	土師器	かわらけ	撹乱層	—	—	(2.0)	—	—	—	非ロクロ調整
21	土師器	かわらけ	撹乱層	—	—	(1.9)	—	—	—	非ロクロ調整
22	青花	碗	埋土	16C後半	—	(2.6)	—	—	透明釉	
23	青花	碗	埋土	—	—	(1.0)	—	—	透明釉	
24	瀬戸美濃	瀬戸黒茶碗	表土	—	—	(2.7)	—	—	鉄釉	釉薬剥離
25	瀬戸美濃	縁釉小皿	表土	—	—	(1.7)	—	—	鉄釉	
26	瀬戸美濃	丸皿	表土	—	—	(2.0)	—	—	灰釉	ロクロ調整
27	瀬戸美濃	端反皿	撹乱層	大窯第1後半	〔9.0〕	(1.7)	—	—	灰釉	ロクロ調整
28	瀬戸美濃	壺類	表土	—	—	(8.6)	—	—	錆釉	ロクロ調整

図 22 Ⅳ区出土遺物

第４章　まとめ

第１節　遺物と遺構について

（１）遺物について

出土した陶器は瀬戸美濃産が主体だが、いずれも表土及び撹乱層からの出土で、破片ばかりのため、器種ごとの傾向等の詳細は不明である。また、虎口石垣の張り出し直下の埋土から15 世紀頃の山茶碗、堆積土より 16 世紀頃の中国製白磁が出土した。かわらけは口縁部もしくは体部のみの破片で、大半が非ロクロ調整であった。瓦も破片が多く、Ⅰ区６トレンチとⅢ区１トレンチから出土した。後者の場合、ほぼ表土からの出土だが虎口の床面に広く散布する形であったため、虎口付近まで及ぶ瓦葺建物の存在を示唆するものと考えられる。

（２）各トレンチの遺構と年代観について

Ⅰ区

Ⅰ区６トレンチ内で、SV1 の続きの２石が検出されたため、SV1 の内側の長さは約７m 以上あることが確認できた。さらに、整地土の端がトレンチ内で確認された他、北側斜面に 50 ～ 100cm 程の石材が散布するため、石垣が北側にもあった可能性が考えられる。ただ、石垣がほぼ残存していないため、破城の際に北側石垣は破壊された可能性がある。また、Ⅰ区６-2 トレンチの北限に南北両方に面がある石が確認できたが、破城時に原位置から移動している可能性があるため、主郭の正確な北限は不明である。

Ⅲ区

調査により露頭する礎石（礎石１～４）より下層に古い整地土と礎石（礎石５・６）を確認したため、２時期が推定される。

第１期：石垣を造成する前の時期。礎石と想定される砂岩の角礫（礎石５・６）が２石確認された。１トレンチ東部より段状の岩盤を検出したが、位置的に石垣の張り出し部分の東側基底部と北側の岩盤と接続する可能性がある。そのため、この時期は岩盤を床面とした可能性がある。そして、礎石を据えるためか床面をある程度平坦にするため、整地土を造成したと考えられる。礎石６付近から瓦片が出土していないため、この時期に瓦葺建物であった可能性は低い。また、現虎口の主郭側入り口に通じるため、小規模な門があったと考えられる。

第２期：第１期に造成された、旧整地土の上に土を盛りつつ石垣を構築し、川原石の礎石を置いた時期。Ⅲ区２トレンチにおいて SV3 と SV4 との接続部に埋め殺しの石垣が確認できなかったため、北面と東面の石垣は同時期に構築されたものと判明した。石垣の張り出し直下から 15・16 世紀の遺物が出土し、整地土と石垣が同時に構築されたものであるため、森氏段階以降に造成されたと考えられる。

礎石１～４に柱が立った場合には石垣が隠れるため、石垣構築と礎石においても時期差がある可能性がある。これらの礎石は主郭側に建物の中心があり柱だけ虎口に突き出した、桟敷状の建物であった可能性がある。

Ⅳ区

当初は主郭西部へ枡形虎口から上がり、御殿もしくは天守に入るルートを想定していた。しかし、本調査で虎口及びその他の遺構も確認できなかったため、主郭への入り口は南東部のみと判明した。（植田）

第２節　まとめ

今回の調査では調査前の凹地形より主郭南東部に虎口が存在するのではないかと考えてⅣ区を設定したが、その凹地は近代以降に形成されたものであることが判明した。その結果、主郭への虎口は南東部に開口する枡形状の虎口のみである可能性が高まった。そうなると登城の導線は南Ⅰ（西腰曲輪）より主郭の南東辺を通り、この枡形虎口に至り、主郭に入る構造であったと考えられる。

また、この枡形の構築過程を明らかにするためⅢ区を設定したが、枡形を構成する石垣に前後関係があるのではないかと考え、主郭より南側に突出する石塁（SV1・SV2・SV3 ）と主郭南辺の石垣 SV4 の間に２トレンチを設定した。その結果は SV4 は延長せずに栗石層のみが確認され、主郭石垣と南側に突出する石塁は同時に築かれた枡形であることを明らかにすることができた。そうなると、SV4 直下に配された SB1 の礎石列は枡形に伴う施設ではなく、むしろⅠ区で検出された内側に面を持つ石垣列で構成される施設に伴うものの可能性が高まった。

Ⅰ区で検出された内側に面を揃える石垣列で構成される建物は天守に相当するものであろうと考えられるが、枡形を入った正面の石垣を天守の土台とすることとなる。SB1 はその天守の回廊部分を支える柱の礎石となる可能性が考えられる。

ただ、枡形の正面にあたる SV4 には鏡石に相当するような巨石が配されており、それを支柱で隠すことは鏡石としては矛盾する。あるいは時期差の存在がこうした矛盾を生じさせた可能性も考えられる。今回の調査では枡形に設定したⅢ区の１トレンチから整地層下から礎石 5、6 が検出されており、少なくとも枡形には２時期の変遷のあったことが確認できた。あるいは枡形構築以前の虎口に伴う可能性もある。

一方、Ⅰ区で検出された石垣遺構は昨年度の調査で少なくとも２時期の遺構面を持つことが明らかとなっている。この時期差と今回Ⅰ区で検出された２時期が一致するかは今後の課題ではあるが、少なくとも主郭および主郭に至る枡形虎口については２時期存在することは明らかである。

その内側に面を揃える石垣列であるが、昨年度の調査より北側へ２石分確認できた。ただ東辺（SV1）がどこまで伸びて北端となるのかについては 6-2、6-3 トレンチを設定したが石垣列を確認することができなかった。両トレンチからは栗石が多量に検出されたが、これは石垣が崩れた結果と考えられる。つまり、Ⅰ区に存在した建物は北・東・南に石垣を伴う穴蔵を有する構造で、西側の主郭からは石垣ではなく、御殿や廊下などから直接出入りができたようである。それが廃城とともに北側だけが石垣を崩したようである。北側山麓には城下町があり、城下から見上げた北辺のみ石垣を意識的に崩したものと見られる。これは城割り（破城）行為とみてよいだろう。

このように今回の調査では主郭虎口のあり方、その枡形虎口と主郭建物の時期差、主郭建物の城割りなど美濃金山城にとって極めて重要な構造を明らかにすることができたといえよう。

次年度は主郭建物の平面構造を把握することにより、枡形虎口との関係もより明らかになるものと考えられる。（中井）

参考文献

愛知県史編さん委員会編　2007 『愛知県史　別編窯業２　中世・近世　瀬戸系』
小野正敏　1982 「15 ～ 16 世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会
小野木学　2012 「東海〈美濃〉―砂岩製宝篋印塔の分布と編年―」『中世石塔の考古学―五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布―』高志書院
可児市　2005 『可児市史　第一巻　通史編　考古・文化財』
可児市教育委員会　2013 『金山城跡発掘調査報告書』
可児市教育委員会・滋賀県立大学　2018 『国史跡美濃金山城跡発掘調査概報Ⅰ』
兼山町史編纂委員会 1972『兼山町史』岐阜県可児郡兼山町
財団法人 犬山城白帝文庫歴史文化館 2009『木曽川と犬山』犬山市教育委員会・財団法人 犬山城白帝文庫
遠江中世石塔研究会編　2009 「美濃の石塔」『東海地方における中世石塔の出現と展開―花崗岩製石塔と在地産石塔―』石造物研究会第 10 回研究会資料
藤澤良祐　2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要　第 10 輯』 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
三宅唯美・小野木学・中嶌茂・砂田普司・竹谷充生　2011 「瑞浪市の中世石塔」『瑞浪市歴史資料集』第 1 集　瑞浪市陶磁資料館
森田勉　1982 「14 ～ 16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究　第 2 号』日本貿易陶磁研究会
矢崎正治 1937『濃州徇行記　濃陽志略』大衆書房
渡辺千明 1996『現代語訳大通寺本　金山記全集大成』太洋社

6トレンチ完掘状況（南東より）

SV1北端検出状況（西より）

I区

SV1 サブトレンチ東面土層（西より）

6-2トレンチ西面土層（南東より）

6-3トレンチ東面土層（北西より）

Ⅲ区1-1トレンチ北面土層（南より）

I区・Ⅲ区

1-2トレンチ全景（北より）

1-2トレンチ東面土層（南西より）

Ⅲ区

Ⅲ区

1-3トレンチ東面土層（南西より）

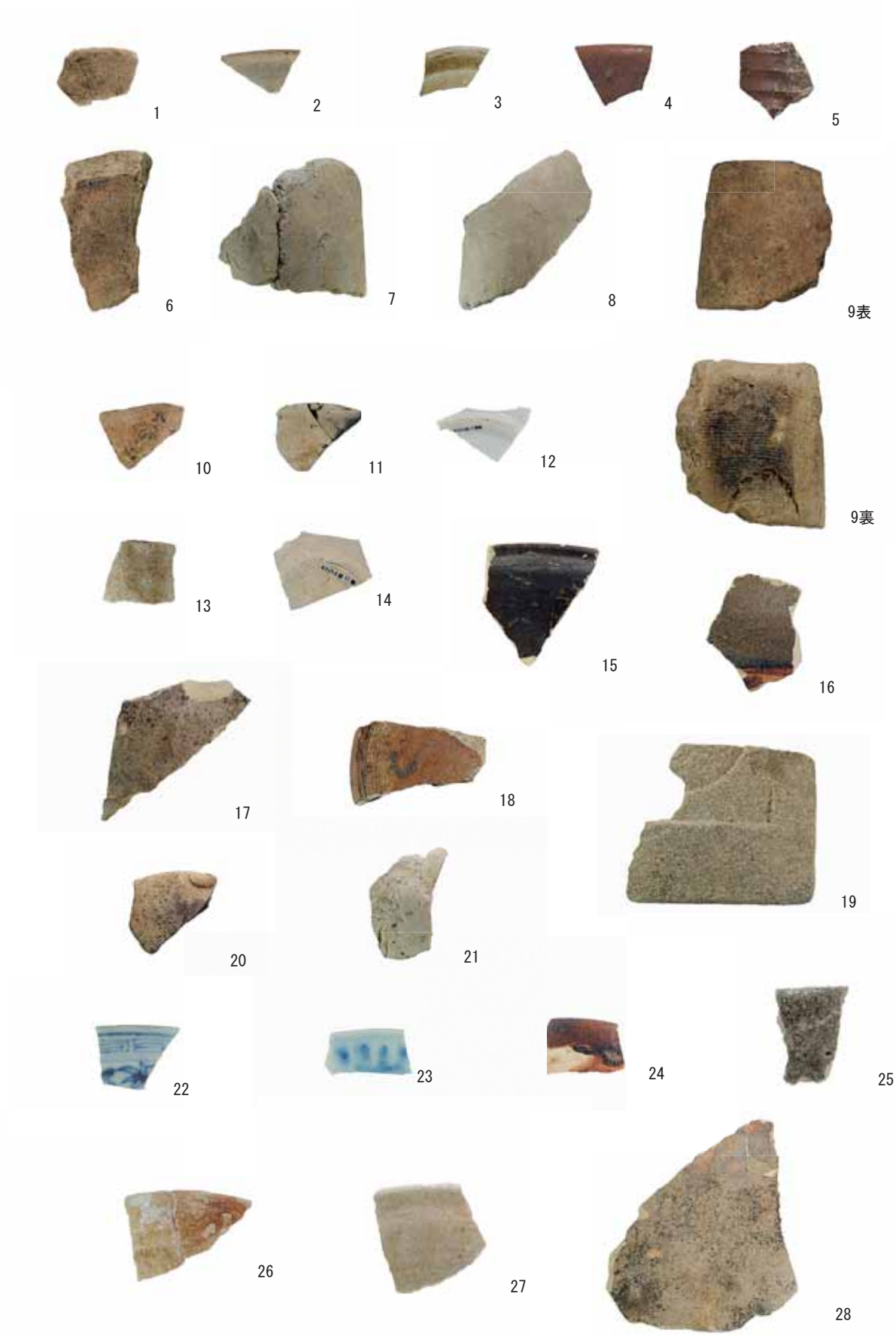
２トレンチ北面土層（南東より）

Ⅲ区１トレンチ完掘状況（北より）

Ⅳ区

Ⅳ区完掘状況（北東より）

Ⅳ区完掘状況（南西より）


1
2
3
4
5
6
7
8
9表
10
11
12
9裏
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28

Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ区出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	くにしせきみのかねやまじょうあとはっくつちょうさがいほう　に
書名	国史跡美濃金山城跡発掘調査概報　II
副書名	
シリーズ名	可児市埋文調査報告
シリーズ番号	55
編集者名	長江真和　中井均　村上慶介　植田紘正　松原草太
編集機関	可児市教育委員会
所在地	〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目1番地
発行年月日	西暦2019年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地名	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号			面積	
美濃(みの) 金山城跡(かねやまじょうあと)	岐阜県(ぎふけん)可児市(かにし)兼山(かねやま) 1418-211	21214	4477	35° 27′ 23″	137° 05′ 49″	20180809～ 20180928 75㎡	遺跡の 内容確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
美濃金山城跡	城館跡	中世	石垣 礎石	瀬戸美濃産陶器 かわらけ 磁器 瓦	

国史跡美濃金山城跡発掘調査概報　II

平成31年3月22日　印刷
平成31年3月22日　発行

編集・発行　可児市教育委員会
〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目1番地
Tel 0574-62-1111　Fax 0574-63-6751
印　　刷　丸理印刷株式会社